



同志社香里中高 マンドリンクラブ

創部50周年記念誌

同志社香里中高 マンドリンクラブOB会

50

Founded in 1963

Campus History



1951年（同志社香里設立時）の校舎



1963年頃（創部当時）の校舎



1965年頃の校舎
(左奥の木造校舎の2階が部室)



1990年頃の校舎

- 1951年7月 同志社と香里学園の合併調印式
- 1951年8月 同志社香里中学校、高等学校開設
- 2000年4月 高等学校に共学の「国際コース」2クラス設置
- 2002年4月 中学校男女共学化スタート
- 2005年4月 高等学校「国際コース」廃止、全クラス男女共学化
(同志社香里中高HP引用)



2010年の校舎

Victory



第1回全国高校
ギターマンドリンフェスティバル
最優秀賞(朝日新聞社賞)



第2回全国高校
ギターマンドリンフェスティバル
最優秀賞



第6回高校
ギターマンドリン音楽祭
金賞



第7回全国高校
ギターマンドリンフェスティバル
最優秀賞



第8回全国高校
ギターマンドリンフェスティバル
イタリア大使賞



第9回全国高校
ギターマンドリンフェスティバル
ペナント



第20回全国高校
ギターマンドリンフェスティバル
全国知事会賞



第21回全国高校
ギターマンドリンフェスティバル
ドイツ連邦共和国大使賞



第22回全国高校
ギターマンドリンフェスティバル
大阪市長賞



第34回全国高校
ギターマンドリンフェスティバル
大阪市長賞

Property



マンドリン
(ガブリエルパンディーニ)



マンドラ
(中出 1989)



セロ
(S.大野 1977)



ローネ
(S.大野 1988)



平成25年度全国高校
ギターマンドリン音楽コンクール
イタリア総領事賞



ティンパニ
(シンフォニックベタル 1990)

Message



創部50周年おめでとうございます

校長 西山 啓一

同志社香里マンドリン部が創部されて50年を迎えます。この間、その演奏は多くの聴衆を魅了してきました。これは部員の日々の研鑽の成果であるとともに、顧問、諸先輩方をはじめとする関係者や保護者の皆様のご理解とご支援の賜物でもあります。マンドリン部が半世紀を歩み続け、50年という節目を迎えられたことに、今まで支えていただいたすべての方に深く感謝申し上げます。

マンドリンの音色が聴衆を魅了し続けてきたのは何故でしょうか。それは音楽と人とのかかわりにまで遡るでしょう。私たちは、素晴らしい演奏を聴いたあと自然に拍手をします。演奏に限らず演説でも同様ですが、共感や、感謝、支持の気持ちをあらわすとき、笑顔で拍手するのは、世界共通の現象です。動物行動学者の小林朋道氏は、相手に対する友好や親和の気持ちと、拍手が作り出す音の特性—パチパチと言う音程が高い音—とがヒトの生得的な認知系の中で、無理なくつながるのではないかと推察しています。マンドリンの醸し出す音がヒトの親和の気持ちとつながっていると言えます。オカリナやオルゴールの音色を聞いて親和の情が湧くのと同じように、マンドリンは奏でる音そのものが人を幸せにするとも言えるのではないのでしょうか。

しかし、マンドリンと言う楽器がいかに優れていても、一人ひとりの部員の技術がいかにすばらしくても、同志社香里マンドリン部としての演奏で高い評価を得てきた実績は生まれませんでした。クラブ活動は決して一人の部員で成り立つものではありません。マンドリン部の50年の輝かしい歴史は、クラブとしての一体感と部員同士の絆の深さの証なのです。

顧問の先生や先輩方の指導や援助はあっても、日々のクラブ活動の中で悩みや葛藤があるのは当然です。聖書でも「鉄は鉄をもって研磨する。人はその友によって研磨される。（箴言27章17節）」とあります。マンドリン部50年の歩みは、技術の向上だけでなく、かけがいのない友人関係を育んできた歴史でもあると言えるのではないのでしょうか。勝ち得たものは演奏の最優秀賞だけでなく、かけがえのない友人との絆でもあったと思います。

同志社香里マンドリン部、次の50年でどのような音色を響かせてくれるのでしょうか、その期待を込めてお祝いの言葉とします。

❖ Message



創部50年おめでとうございます

顧問 市野 和康

マンドリン部ができて50年ということですが、この間クラブ存続の危機も乗り越えての50年ということで本当におめでとうございます。

卒業後もマンドリン関係に携わっておられる方も多くおられて、別の文章にも書かせてもらったように、雑誌「奏でるマンドリン」に本校が掲載されましたのは、卒業後も関西マンドリン界で活動されている卒業生の皆さんの活躍があるからということを知りました。また、NHKの番組でクラブが取り上げられたのも、雑誌に掲載されたことも理由の一つであるようでした。そういう意味でも本校でも伝統のあるクラブで、顧問としても誇りに思っています。

全国高校ギター・マンドリンフェスティバルの最初の頃は、朝日新聞賞などの素晴らしい賞を受賞していましたが、1990年代後半から何年か不出場で、私が顧問になった2000年度以降では、2002年度より出場し、優秀賞は受賞し続けていますが、それ以上の賞は受賞していません。OBの井上先生に技術指導をしていただき、部員たちは一生懸命に努力していますが、全国でのレベルも高く、受賞できていない点は、ご理解をお願いいたします。

今年度より、フェスティバルがコンクールとなり、賞の形態も変わってくるようで、優秀賞の校数が決まってくるようです。私が顧問になってから続いている優秀賞が受賞できるかどうかはわかりませんが、聴きにきていただいた卒業生の方々には、今後も喜んでいただける演奏にしたいと、部員たちは7月のコンクールに向け、日頃から練習に励んでいます。

今回のみんな集まれ演奏会は、私が顧問としては最後の合同演奏会で、2000年度より4回目になります。2000年度は、部員も少なく現役としては非常に寂しい演奏会でしたが、回を追うごとに部員も増え、うれしいかぎりです。このような合同演奏会は、現役生と卒業生諸氏とふれあい、いろいろなことが吸収できることと思いますし、このような演奏会が続いていき、さらにクラブの発展があることを願っています。

次回以降のみんな集まれ演奏会は、違った立場で聴かせていただきたいと楽しみにしています。

✦ Message



お祝いの言葉

同志社大学マンドリンクラブSMD会 会長 吉村 良之

同志社香里中高マンドリンクラブ設部50周年記念演奏会、記念誌の発行、誠におめでとうございます。1963年創部以来今迄50年間続けてこられた事は大変な努力があったと思います。50年前の昭和38年当時京都市内では実に多くの高校生マンドリン合奏団が結成されましたが、残念ながら現在同志社関係を除き全く活動しているところはありません。貴クラブはその間OB、OGの皆様方の多大なご支援があったものと思います。その中からは現在の日本マンドリン界における指導的な立場のマエストロや又、プレイヤーを数多く輩出された事は全国的に見ても例を見ない立派な業績です。同志社香里中高ここにありと日本に誇れる合奏団であると思います。

願わくは今後も現役、OB、OG合同の“みんなあつまれ演奏会”が開催され、世代を超えて楽しい音楽が紡ぎ出される事を期待しています。今日出演の皆様方は50年前は皆若かったのですから。



創部50周年を迎えて

現役部長 鶴田 茜

「音楽が好き！」という理由だけで入部し、マンドラという当時は全く知らなかった楽器を手にしてから、5年以上の月日が流れました。入部当初は純粋にクラブを楽しんでいただけでしたが、学年が上がるにつれて重くなっていく責任や重圧からは、何度も逃げ出したくなったことがあります。しかしその度に、周りの方々の支えのおかげで何とか乗り越え、創部50周年というこのような記念の年に部長をさせていただけるほどになりました。

いつも笑顔で元気を与えてくれる後輩。悩んでいると真っ先に声をかけてくれる同輩、お忙しい中でも相談に乗ってくださる先輩方、私たちの活動を陰ながら支えてくださる顧問の先生、演奏会の度に応援してくれる友達や学校の先生方、そして、クラブが好きである私のことを理解し協力してくれる家族に、この場をお借りして御礼申し上げます。

当たり前のように楽器を弾くことができる環境への感謝をこれからも忘れず、残り少ない現役生活も悔いなく送りたいと思います。そして、後輩たちがより素敵なクラブを創り上げていってくださるように。同志社香里マンドリンクラブのますますのご繁栄をお祈り申し上げます。

❖ Message



創部50周年によせて

保護者会代表 赤松 由里子

同志社香里マンドリンクラブ創部50周年おめでとうございます。

本日の演奏会に向けて、OBの皆様には、お忙しいなか4月21日より8回にわたり現役生との合同練習の機会を設けていただき誠にありがとうございます。幅広い世代の先輩方と一緒に練習を重ね、晴れの舞台上で演奏できたことは、子どもたちにとって多くのことを学んだ貴重な体験として今後の糧となることでしょう。

保護者会は、4年前の「第7回みんなあつまれ演奏会」が開催された年に演奏会で顔を合わせたときにお顔を知ってご挨拶したいという声があり、また、新入生の保護者にマンドリンクラブの年間活動の概要などを説明できればという趣旨で作られました。毎年6月に新入生の保護者の皆さんとの顔合わせと懇親会を兼ねて、保護者会を開催しておりますが、クラブ活動の運営に立ち入ることなく子どもたちの活動をそっと見守ることが保護者会のスタンスです。

最も多感な成長期である12歳から18歳の部員同士が、音楽を通じて互いに切磋琢磨し、卒業後も友人、先輩、後輩と同窓で結ばれた絆を繋げていかれる良き伝統を保護者としても大変うれしく思っております。

50年のマンドリンクラブの歴史の中では、部員数の減少により対外演奏会の機会もなく活動停止状態となった時期もあったそうですが、現役との合同演奏会を開催されるなどOBの方々のご尽力により復活を果たし、近年は40名前後の安定した部員数となっています。

増えた部員のために、OBの方々より楽器を寄贈していただき、とても恵まれた環境で日々の練習をすることが出来るようになりました。定期演奏会やギター・マンドリンフェスティバルをはじめ様々な演奏会に参加する機会を得て、子どもたちは大きな感動と出会い、あるときは思った通りの演奏ができず悔しい思いをしたこともありました。

個人の演奏技量や表現力が毎日の練習の積み重ねによって上達するだけでは、合奏において大きな感動に出会うことはできないでしょう。一人一人の力を部全体でひとつに結集させることで、その音色は素晴らしいハーモニーとなり聴衆に感動を与えてくれます。

日頃より子どもたちの成長を見守り、ご指導してくださっている顧問の市野先生、麓先生、技術顧問の井上先生、OBの皆様にご心より感謝申し上げます。

♣ *Doshisha Spirit*



同志社香里マンドリンクラブペナント



新島 襄先生 (1843~1890)



良心の碑

同志社香里マンドリンクラブ50年のあゆみ

あらすじ『栄光、挫折、そして夢に向かって』

自分たちもマンドリン合奏を

1963年早春、6人の高校生が香里の丘で初めてマンドリンとギターを演奏した。このマンドリン同好会は翌年クラブに昇格、「同志社香里マンドリンクラブ (DKMC)」が誕生する。「同志社大学マンドリンクラブの演奏を聴いて感動し、自分たちもマンドリン合奏をやってみたいと思った」村上眞嗣・前OB会長 (1965年卒) はクラブ設立のきっかけをこう話す。初の対外演奏の舞台は1964年秋の同志社大



第一期生たち ペナントと共に

学学園祭。十数名の部員が同志社栄光館で「荒城の月」「古いフランスの歌」「マジック・イン・ザ・ムーンライト」などを演奏する。指揮者は上田昌平 (1965年卒)、コンサートマスターは村上であった。第1回定期演奏会は1966年9月、同志社大学学生会館で開催される。「古戦場の秋」(小池正夫)「魅惑島」(コック)などを演奏する。「定演を開いてそこで合奏ができることの喜びをひひしと感じた。あの感動があったからこそ、この歳になっても現役で楽器を弾いているのだと思う」と東野隆行 (1967年卒) は話す。1967年同志社大学マンドリンクラブOBの中田哲夫氏が技術顧問に就任。同氏の転勤に伴い、翌年マンドリン・ギター研究者の木下正紀氏が後を引き継ぐ。以後四半世紀にわたり指導を受ける。1971年第1回全国高校ギターマンドリンフェスティバル (全日本高等学校ギターマンドリン音楽振興会主催) で「マンドリンの群れ」(ブラッコ)を演奏し、最優秀賞 (朝日新聞社賞) を獲得。また翌年の第2回フェスティバルでは「メリアの平原にて」(マネンテ)を演奏し、最優秀賞連続受賞の頃 (第7回定期演奏会) 2年連続最優秀賞に選ばれる。

「高校生らしい態度、高枚生離れした技術」を標榜し、高校マンドリン界を力強くリード。「速いパッセージを圧倒的なテクニックで弾きこなす」とする評価を受ける一方、音の粗さや表現不足が「強いて言えば」の課題として挙げられた。「高校生、中学生のレベルをはるかに超える演奏」との評判で、定期演奏会は毎回大成功を収める。クラブの第1次黄金期である。



最優秀賞連続受賞の頃 (第7回定期演奏会)

名声の渦中で

しかし「高度な演奏後術の追求、また、賞狙いだけで練習するの

はクラブ活動の本質から外れているのではないか」との意見が学校側から出され、クラブが揺れる。結果として1973年の第3回フェスティバルへの出場は見送られる。1974年第4回フェスティバルで「エカーヴの嘆き」(ラウダス)、翌年第5回フェスティバルでは「交霊術」(ブランツォーリ)を演奏し、共に優秀賞を獲得。速いテンポの曲を華麗に演奏する従来のスタイルに加え、ゆっくりとした曲を歌って演奏する

手法を採用する。変化が起きたのは1976年。同年3月の第10回定期演奏会前後から部員数が減少し、第6回フェ



1970年代中頃の部員たち

スティバルでは「黄昏」(ベッルーティ)を演奏するが、努力賞に終わる。この苦い経験も、1977年第11回定期演奏会の成功、ならびに同年第7回フェスティバルで「序曲ニ短調」(ファルボ)を演奏し、三たび最優秀賞の栄冠に輝いたことにより克服される。

特に第11回定期演奏会でマンドリン独奏曲「幻想的円舞曲」(マルチェッリ)やギター二重奏曲「セレナーデ第1番」(カルッリ)などのソロ曲を演奏した結果、「部員がソロの楽しさや難しさを知り、個人演奏技術向上のきっかけとなった」と高井康文 (1979年卒) は当時を振り返る。1978年第8回フェスティバルでは「歌劇『仮面』序曲」(マスカーニ)を演奏し、優秀賞ならびにスペイン大使賞を、そして翌年第9回フェスティバルでは「歌劇『ルスランとリュドミラ』序曲」(グリーンカ)を演奏し優秀賞、大阪市長賞を獲得する。1979年第13回定期演奏会、翌年の第14回定期演奏会、そして2年後の第15回定期演奏会までに部員は50人近くに増え、卒業後も全国各地で活躍する第一級の奏者、指揮者を輩出した。第2次黄金期の到来である。



最多メンバーを擁した第16回定期演奏会

充実する演奏活動

1980年高知学生マンドリン連盟の招待を受け、同連盟第13回定期演奏会に出演。「シンフォニア」(マネンテ)などを演奏する。また、

高知大学マンドリンクラブ、高知女子大学マンドリンクラブ、高知学芸中高マンドリンクラブなどと合同で「大幻想曲『幻の国』～邪馬台」(鈴木静一)などを演奏する。翌年香川県高松市に演奏旅行。高松第一高校マンドリンクラブ第4回定期演奏会に賛助出演し、「ローラ序曲」(ラヴィトラノ)などを演奏する。1982年第16回定期演奏会後、クラブは再び部員数の減少に悩まされ、学生指揮者の急な交代という事態にも直面する。しかしこの局面も同年の第12回フェスティバルで「滅びし国」(G. フィリッパ)を演奏し、優秀賞と大阪市長賞を獲得することで克服する。1983年全国高等学校ギターマンドリン連盟に加盟。同年第1回高校ギターマンドリン音楽祭(同連盟主催)に出場、「組曲『スペイン』」(ファルボ)を演奏し、金賞を受賞する。しかし、同年のフェスティバルには出場を見合わせる。同年岡山県津山市を訪問し、津山青年マンドリン教室第1回定期演奏会に賛助出演。「歌劇『劇場支配人』序曲」(モーツァルト)などを演奏する。1984年からフェスティバルと音楽祭の両方に出場。同年の第2回音楽祭では「歌劇『ウインザーの陽気な女房たち』序曲」(ニコライ)を演奏し、金賞受賞。そして第14回フェスティバルでは「交響的前奏曲」(デ・ミケーリ)を演奏し、優秀賞を獲得する。翌年第15回フェスティバルでは「歌劇『運命の力』序曲」(ヴェルディ)を演奏し、優秀賞ならびに全国知事会賞を受賞する。前年と同様、約40人の部員からなるバランスの良いパート編成、そして評価の高い演奏でクラブ史上3度目の黄金期を迎える。



第4回みんなあつまれ演奏会(1990年)

苦難の時期へ

1988年再び高知学生マンドリン連盟の招待を受け、同連盟第21回定期演奏会に出演、「アゾレス諸島にて」(マネンテ)などを演奏する。また合同ステージでは「スペイン第一組曲」(鈴木静一)などを演奏。同年第6回音楽祭では「主題と変奏」(ミラネージ)を演奏し、音楽祭大賞を受賞する。1989年第19回フェスティバルでは「歌劇『オペロン』序曲」(ウェーバー)を演奏し、優秀賞、大阪市長賞を獲得、翌年第20回フェスティバルでは「祖国への愛」(アモロソ)を演奏し、優秀賞と全国知事会賞を受賞する。栄光の歴史は続くと思われた。しかし、1990年以降、中学1年生ならびに高校1年生を中心とした新人部員の獲得に失敗し続け、部員数は年々減少していく。他方、1980年代後半から他校の演奏レベルの向上が鮮明に。部員減少と士気の低下からクラブ活動が停滞、フェスティバルへも第22回を最後に1993年以降は出場を見合わせる。

1993年第11回音楽祭では「秋の夕暮」(マネンテ)を演奏するが、初の銀賞に終わる。この結果に部員は戦意喪失。翌年第28回定期演奏会までに部員は12人に減少。「定演はやったが、少人数で迫力が出せなかった。クラブは今後どうなるのだろう、という思いで一杯だった」と内藤潤二(1994年卒)は話す。1994年第12回音楽祭では学生指揮者なしの5人で「チャルダス」(ピッリ)を演奏。しかし2年連

続銀賞の結果となる。名門・DKMCの面影はもはやそこにはなかった。

同年冬、「人数的な問題から、今後、木下氏の演奏指導を受けることは難しい」と当時の顧問・喜多正明氏は判断。村上OB会長を同伴して木下技術顧問と会談し、指導の辞退を申し入れ、木下氏はこれに応じる。以後、しばらくの間クラブは対外演奏の機会を得ることなく、実質上活動停止状態となる。



第5回みんなあつまれ演奏会(2000年)

名門復活を賭けて

1996年夏、若手OBが現役の活動を励ます目的で演奏会を企画。また積極的な勧誘活動が奏功し、一時は1人にまで落ち込んだ部員が11人に増加。1997年1月に同志社大学学生会館で3年ぶりに開かれた第29回定期演奏会では、現役9人、OB18人で「海の組曲」(アマデイ)などを演奏する。同年6月第15回音楽祭に出場。「踊りと唄」(カラーチェ)を7人で演奏し、金賞に返り咲く。翌年1月には現役、OB合同で第30回定期演奏会を開催。「組曲『吟遊詩人』」(アマデイ)などを演奏する。クラブは息を吹き返したように見えた。しかし定演後部員は3人に減少。再度廃部の危機が訪れるが、細々と活動を続ける。1999年4人の部員のうち3人が日本マンドリン連盟関西支部中高部会(旧・京都高等学校マンドリン連盟)第9回演奏会に出演。同志社女子中高マンドリンクラブなどとの合同演奏に参加する。

2000年4月、同志社香里中高が男女共学化。この春、中1・3人、高1・1人、高2・1人が入部、計8人となる。同年5月の中高部会第10回演奏会には合同ステージに3人

の部員が出演する。同年9月第5回みんなあつまれ演奏会を開催。これを機にマンドリン奏者の井上泰信(1993年卒)が技術顧問に就任。当時部長を務めた今井太隆(2003年卒)



就任当時の井上技術顧問

は「それまでは目的もなく活

動してきたが、この演奏会で現役が奮い立った」と話す。井上技術顧問の指導の下、合奏の楽しさや舞台に立つ喜びを強く感じたという。2001年、3年ぶりに定期演奏会(第31回)を開催。また4年ぶりに音楽祭(第19回)に出場。「ソナタ・イ短調」(久保田孝)を演奏するが銀賞に終わる。発展途上過程で演奏・運営両面に不安を抱えるクラブの実態が浮き彫りになった。部員は再建に向けて努力を続ける。

2002年、10年ぶりの出場となる第32回フェスティバルでは「シリュスへの帰還」(ミゲール)を演奏。優秀賞を獲得。同年第20回音楽祭でも同曲で5年ぶりに金賞を受賞。クラブ再生の芽が出てきた。部員数は増加基調に転じ、活動は回復軌道に乗り始める。

2005年7月、第35回フェスティバルで「シンフォニエッタ・ニ短調」



第31回定期演奏会 (2001年)

(ゼッピ) を演奏。優秀賞を受賞。「昔のDKMCを彷彿させる立派な演奏。感無量」マンドリン奏者の柴田高明 (1995年卒) はうなった。クラブの混迷期を経験した柴田にとって、26人編成のパンチの効いた歯切れのよい演奏は夢の出来事のように映った。

このフェスティバル直前、部員は技術論から音楽に対する考え方までとことん話し合った。「一部の奏者」ではなく「全員」で響かせる合奏をするには何が必要か。そもそもクラブとは何か。誰のために演奏するのか。こんな意見が出た。「みんなでやろう」という意識。他の部員を思いやり、弾けないところは助け合う気持ち。共通の目標達成に向けて各自の役割を果たす使命感。「フェスの前に部員の心が一つになった。賞の獲得よりも大切なものを見つけたような気がする」と吉村宣央 (2006年卒) は当時を振り返る。



第40回定期演奏会 (2010年)

受け継がれる「香里スタイル」

2005年以降は30人超の安定した部員数を維持。特に女子部員の増加は著しく、今では過半数が女子となった。定期演奏会は京都コンサートホール、長岡京記念文化会館という同志社発祥の地京都を代表する2つの会場を舞台に毎年開催。

部長を務めた恩智翔子 (2010年卒) は次のように話す。「プロも演奏するホールでの経験は、DKMCの伝統や部員の生涯のステータスとしても一生心に残るだろうと思い、早々に京都コンサートホールを押さえました。また、最後のステージを音響のすばらしいおしゃれなホールでという強い憧れがありました。最後の曲の最後の音が消え、静寂に包まれた時には鳥肌が立ちました」

このような経験は、単なる学校のクラブとしての総仕上げというだけではなく、今後の人生においてひとつの大きな糧となることは

想像に難くない。高校3年生によるアンサンブルステージも復活し、「聴衆に楽しんでもらえる」「マンドリン音楽の枠組みに拘らない」「何より家族や友人へ感謝の気持ちを込めた」演奏会作りに努めている。難曲に果敢に挑み、決して妥協せず、高い音楽性と技術を求める「香里スタイル」は今なお変わっていない。フェスティバルでは2006年に「エル・カミーノ・リアル」(リード)、2007年に



第40回全国ギター・マンドリンフェスティバル (2010年)

「歌劇『オペロン』序曲」(ウェーバー)、2008年には「『真夏の夜の夢』序曲」(メンデルスゾーン)、2011年には「歌劇『ルスランとリュドミユラ』序曲」(格林カ) を演奏。また学校説明会や教会でのクリスマスコンサートなど、学内はもちろん地域の人々への演奏など学外での活動も積極的に行っている。

「讚美歌(405番)やカレッジソングを弾いたかと思います。ホールは礼拝堂で数十人が登壇するには狭かったのですが、お客さんの反応は良く、またキリスト教主義の学校が集まるイベントということで、学校説明会も兼ねており、多くの方にマンドリンクラブに興味を持ってもらうことができました」芳川翔太 (2012年卒) はこのように話す。

速いパッセージを華麗に弾きこなすという香里の伝統的スタイルはよく知られ、また評価されてきた部分でもあるが、「歌劇『ルスランとリュドミユラ』序曲」(格林カ) を演奏した前出の芳川はこうも話す。「井上先生がDKMCに入部されるきっかけとなった曲でもあり、よい演奏にしなければという意識がありました。しかしやはりそう簡単ではなく、大会の少し前になって、テンポを下げ、一音一音をよりハキハキと弾くことによって、音量や表現の幅を広げてみました。もどかしい感じもありましたが、結果的には「速くてカッコイイ」ルスランとはまた違ったいい演奏になったと印象に残っています」ただそのまま受け継ぐだけではなく、その時代に在籍した部員独自のスパイスも効かせ、新たな引き出しを加えながら次代へと受け継いでいこうという姿勢もまた、伝統の一部だといえるかもしれない。



第42回定期演奏会 (2012年)

近年の演奏会では第二部の企画ステージとして、第41回では嵐メドレー、第42回ではAKB48メドレー、第43回ではアイドル懐メロメドレーを演奏。部長、そしてコンサートマスターを務めた千賀亮（2013年卒）次のように言う。「当初は初めての試みで、恥ずかしいと思うこともありましたが、練習していくにつれて楽しくなってきました。パフォーマンスのアイデアを出すことは、合奏で意見を言うことなどと比べて下級生も言いやすいので、下級生の意見も反映させつつ、部員全員でひとつのステージを作り上げることができました。このようなことが、クラブの結束力や向上心にも繋がっていると思います。企画ステージによって奏者と客席が繋がることができます。企画ステージでお客様が手拍子を始めてくれた時のうれしさと興奮は本番でしか味わえない特別な思い出です」



第43回定期演奏会（2013年）

アイドル懐メロメドレーについては、まさにその時代に青春を過ごした部員の保護者にアンケートを取って選曲したといい、学校生活を支えてくれている保護者への感謝の念がこめられている。驚きと好感を持って受け入れられているこの企画ステージも、同じクラブに籍を置いた者同士のつながりを一層強固なものにするだろう。

卒業生の活躍

古くはイタリアに留学した石村隆行（1981年卒）をはじめとする海外組は、ドイツに渡航した柴田高明（1995年卒）、フランスとベルギーに渡った橋爪皓佐（2003年卒）など、日本に飽き足らず海外の風を肌で感じようという者たちが続き、イタリアで楽器修復と制作技術を修めて帰国した根岸広輝（1990年卒）も含め、小さな殻に閉じこもらない活躍が続いている。その他、社会人団体での指揮者やコンサートマスター、各種教室での教授活動など、重要な役割を担っている卒業生は数多い。近年目立つのは2005年以降に卒業した若手OBの台頭である。そのほとんどが卒業後も楽器を手放すことなく同志社大学マンドリンクラブやその他の団体に参加し演奏活動を継続している。2007年の大阪国際マンドリンコンクール第3位・2010年の日本マンドリン独奏コンクール第1位の和泉亨（2007年卒）や日本ギターコンクールに2年連続して入賞の西田昌弘（2008年卒）など、「古豪復活」の勢いは記録としても残るようになった。積み重ねてきた歴史を礎に、大切にすべきものを守り、DKMCはこれからも前進し続ける。

（文章：平野功・井上泰信・松村成弘）



第7回みんなあつまれ演奏会（2009年）

第5回みんなあつまれ演奏会（2000年）



柴田高明



木下正紀



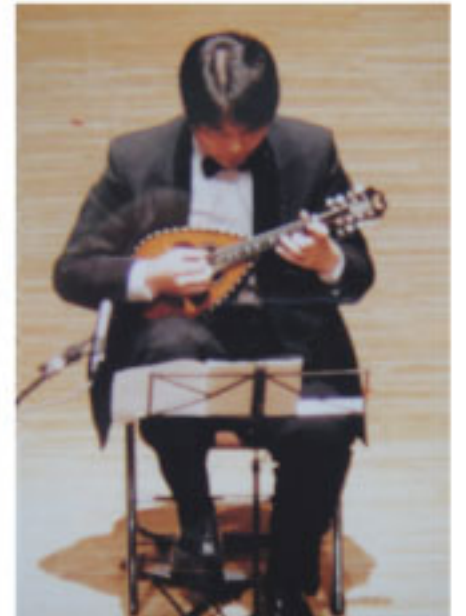
井上泰信



吉本雅啓



上田 隆



石村隆行



第5回みんなあつまれ演奏会（メルパルクホール）



打ち上げパーティ（チサンホテル）

第7回みんなあつまれ演奏会 (2009年)



現役ステージ



指揮手 堀文彦



横山宏治、吉本雅啓、高井康文、井口祐一



司会の野村奈央



曲目解説



井上崇信と石村隆行



コンマス 田島康成



1STパート



和泉亨と西田昌弘



2NDパート



セロパート



柴田高明



ベースパート



ローネパート